

～2021年総会開催のお知らせ～



zoomによるオンラインライブ同時配信

2021年6月12日に年次総会を開催いたします。会場は例年通りかどやホテルで開催する予定です。遠方の会員も参加できるようにZOOMでの同時ライブ配信も予定しております。総会のほかに昨年書籍を出版した牛久保理事と武内理事による特別講演も企画しておりますのでぜひご参加ください。詳細は裏面の抄録ご参照ください。

- ・日程:2021年6月12日(土) 総会18:00～ 特別講演19:00～
 - ・内容:総会・特別講演 武内理事「テンプレート理論と臨床例」
牛久保理事「テンプレート療法の応力を矯正治療に利用」
 - ・場所:かどやホテル・ZOOMによる同時配信
- ※コロナウイルスの感染状況によってはWebのみの開催になります。
予めご了承ください。

～テンプレート治療教本 出版プロジェクト始動～

城西歯科大学(明海大学歯学部)薬理学教室の故佐藤精一教授が研究生を率いて初めての海外旅行として(やっと自由に動けた)、シカゴの(American Academy of Functional Prosthodontics)の研修会に参加目的で(1979-8)旅立ちました。サンフランシスコでビールを注文するとパスポートを拝見(年齢確認)と目から鱗。

オレンジジュースが通じず、リンカーンパークに至っては書いても通じないで(スペルミス)行けなかった目から鱗。

鮮烈なCasey M Guzayの Quadrant Theoremは上下顎運動中心は顎関節内でなく、頸椎の正中環軸関節にあり、開口、閉口、側方運動は正中環軸関節を軸に公転運動をしているとの証明、および、正常と異常咬合とを明確にした講義に目から鱗。

次にDr.Stenger先生のスポーツ歯学、Dr.Fonder先生の咬合異常のストレスからの全身疾患の改善に目から鱗。

帰国後、小児科医、故鶴原 常雄医師の歯科と医科との共同研究「テンプレート研究会」の快諾は20世紀の最大の目から鱗でした。

会員先生方におかれましてもテンプレート療法は目から鱗の経験だったと思います。この事実を書籍にして文章にして後世に残す試みを決意しました。

先生方の目から鱗の臨床例の原稿を募集いたします。奮って投稿御願ひ申し上げます。

募集の詳細は同封の募集要項をご参照してください。

ご要望、ご質問があれば理事長か事務局雨宮までご連絡ください。

『テンプレート療法の応力を矯正治療に利用』

牛久保矯正歯科
牛久保 順一 理事

当院は矯正歯科専門で開業しています。最初に御覧に入れる症例は私がテンプレート治療を導入するきっかけとなった症例です。今から23年前患者さんが9歳の時に叢生を主訴に、非抜歯で矯正治療を行い動的治療期間7年半で16歳の時に矯正治療を完了しています。治療完了後8年経過し下顎前歯部の叢生が戻ってしまった為、再度マルチブラケットによる再矯正治療を行い1年半実施しました。咬合を改善出来たと思ったのですが、その後患者さんから肩こり等の不定愁訴を発症するようになったと相談を受け、テンプレート療法を勉強するきっかけとなりました。

次のケースは、Angle Class II div.2 の上顎前突過蓋咬合症例で上顎前歯部の過蓋と舌側傾斜が強い為、下顎位は後退傾向が強く体調不良を呈していた症例でした。過度の咬合圧によりテンプレートを損傷し易く、その都度調整に時間をとられてしまうので、当院ではバイオスター(歯科用加圧成形機)を使用して上顎にシリコン素材のソフトタイプ・リテーナーを作成する事で、テンプレートの損傷を防ぎ長期間使用して頂く事ができる様にしています。この患者さんは日常低いテンプレートを使用して頂いた際、ソフトリテーナーを常用されていまして咬合圧の応力を利用し、上顎の前歯部を徐々に圧下し舌側傾斜も改善出来る様、段階的にセットアップしながら使用させる事で、ある程度の矯正力も掛けることが出来ています。

最後は下顎後退位を伴った上顎前突症例に積極的にテンプレートを使用したケースを御覧に入れます。この症例では最初にテンプレートを使用して頂き下顎を正しい顎位に誘導しながら、前歯部を圧下し上顎の空隙を閉鎖する事で前突感を軽減し、非抜歯で矯正治療を行いました。保定期間中も夜間はテンプレートを使用させています。注目して頂きたいのは顔貌の変化です。

「症例から読み解く咬合の5大因子・10の要点 咬合医学の臨床入門」出版記念講演抄録 『テンプレート理論と臨床応用』

Tデンタルオフィス
(旧壺番館デンタルオフィス)
武内久幸 理事

私が卒後間もない頃咬合を悪くする患者体験をした。そこで得た経験を礎にその後積み上げた臨床と理論を1冊の書籍に簡潔にまとめ昨年出版した。

私の体験により咬合がいかに私の身体にとって大切で全身の健康に多大な影響力を持っているかということを経験で理解した。それで、その後の臨床上の歯の予防、治療、メンテナンスに対する考え方が大きく変わった。私の咬合治療で重要視している5大因子は①垂直的咬合高径②水平的咬合位③ガイド(前後左右)④咬合平面⑤力(外力、内力)である。その中の垂直的咬合高径や水平的咬合位などに関わる中心的理論がテンプレート理論である。この理論は前原潔先生から手ほどきをしていただいた解剖学、生理学と力学を中心とした考え方である。また、多くの患者を診ていくうちに他の要素も関与していることが解かった。それらをまとめたのが5大因子と咬合の10の要点である。咬合の10の要点とは①早期接触②咬合干渉、咬頭干渉③咬合支持④はまり込み⑤顎関節への負担、耳への影響⑥偏咀嚼、顔面の非対称⑦筋拘縮⑧姿勢の歪み⑨非歯原性歯痛⑩ストレスである。この5大因子と10の要点が34年間の私の咬合臨床の基盤となっている。本日はその理論と臨床例を簡潔にまとめたので会員のみなさんにご高覧頂きたい。